

影 CT時にイオパミドール(イオパミロン 300) 100ml 投与したところ、検査中より顔面から頸部に掻痒感を伴う発疹、紅斑が出現した。ヨード過敏症と診断された。外来通院中の2003年3月にMRIにて肝細胞癌再発および門脈腫瘍塞栓が認められた。PIVKA-IIも4210mAU/mlと上昇し、門脈腫瘍塞栓合併肝細胞癌再発と診断。CO₂-DSA下にてリザーバーカテーテル挿入し、化学療法継続し、奏効している。ヨード過敏症であっても血管造影施行し、奏効が得られた貴重な症例と考え報告した。

7 門脈狭窄に対する経回腸静脈的ステント留置後、Lip-TAEを繰り返し施行した肝細胞癌の1例～その後の経過～

金子 和真・田村 康・小林 真
吉村 朗**・和栗 暢生・須田 剛士
市田 隆文*・青柳 豊
新潟大学大学院医歯学総合研究科消化器内科学分野
新潟大学医歯学総合病院臨床治験部*
南部郷総合病院消化器内科**

症例は、73歳の女性。91年にC型肝硬変と診断され、97年にS8に経4cmのHCCを発症した。また、LGVを中心とする著明なPorto-Systemic shuntと門脈本幹の狭窄を認めたため、経回腸静脈的にshuntの閉鎖と門脈本幹のstentingを施行、門脈血流を改善させた後に、Chemolipiodolizationを施行した。その後も、HCCの再発をきたし、Lip-TAE、RFAを繰り返し施行した。2003年6月、胆管内浸潤したHCCから胆道出血を来した。ENBDを肝門部に留置した後、止血目的に出血領域にLip-TAEを施行した。出血はいったんはコントロールされたが、その後2度再出血を来し、肝予備能の低下、腎不全に至り、肝癌発症から約5年後に亡くなった。本例は当初予備能の低下した状態であったが、門脈内stentingを行うことによって、繰り返し治療を行うことができ、比較的長期生存を得た症例であるため、若干の考察を加え報告する。

8 セクタ型探触子使用により腹腔鏡下RFA術が可能であった被膜下肝細胞癌の1経験例

矢野 雅彦・松田 康伸・三浦 隆義
大嶋 智子・福原 康夫・本間 信之
小林 真・五十嵐正人・玄田 拓哉
和栗 暢生・川合 弘一・山際 訓
青柳 豊
新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器内科学分野

症例は78歳、男性。2002年に腹部CTにて肝右葉2ヶ所にHCCが認められ、IVR下治療および経皮的RFAが行われた。以後再発は認められていなかったが、2003年10月腹部USにてS3-4被膜下およびS3に低エコー腫瘤を指摘され、MRIでHCC再発と診断。CDDP動注療法施行後、US上表面突出性のS3-4境界部腫瘤に対し腹腔鏡下RFAが追加される方針となった。直視下で病変は指摘できず、リニア型探触子で鎌状間膜直下に腫瘤を確認した後、セクタ型を用いて展開針を穿刺し設定温度80℃で10分+5分間の2回焼灼施行。さらにS3腫瘤も指摘可能であったため、同様に10分間焼灼した。術後観察で鎌状間膜の一部に損傷が認められたが支障なく、1週間後のCTで十分な焼灼範囲が得られていたため術後8日目に退院となった。超音波像と針の穿刺面が一平面上に得られるセクタ型探触子は本症例の様な直視下で観察困難な被膜下腫瘍の穿刺治療に有用であり、腹腔鏡下治療の適応が広がると考えられた。

9 胆管内発育型肝細胞癌に対し内視鏡下に腫瘍塊を摘除し得た1例

岡 宏充・大関 康志・和栗 暢生
須田 剛士・小林 正明・本間 照
野本 実・青柳 豊
新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器内科学分野

症例は73歳、男性。1998年よりHCCの出現を認め、RFA、PEITにて加療。2002年10月に多発性にHCCの再発を認め、以降動注化学療法を繰